にいがた

北から南から

姜先生

八木三男

友人の韓国留学先の指導教授は四十を越したばかりの女性教育社会学者、小柄な姜（カン）先生である。友人が彼女の計らいでソウルから車で三時間も離れた小さな私立農業学校で、日本の教育について講演する手はずになっていた。彼女はその学校の運営に関わっているとのことである。妻とわたくしも同道した。講演は子どもの権利条約と日本の教育といった内容であり、農業学校は「ともに生きる平民を育てる」を標榜する少人数のきわめてユニークなそれ自体研究対象になりうる学校なのだが、いまはそれは措く。この小文の主題は姜先生がわたくしたちに示した濃密な計らいのことである。

姜先生は朝の九時から夜の九時まで丸一日つきあってくださっただけでなく、途中の小休憩のお茶をはじめ、晩餐までご馳走してくれた。固辞したが聞き入れてもらえなかった。そのうえ、温陽という温泉町の民俗博物館や上海事件（一九三二年）＊の尹奉吉の顕彰祠に案内し、三割引きで温泉宿をも予約してくださったのである。わたくしたちは終始恐縮のしどおしだった。

友人の説明によれば、これは韓国流のもてなしかただという。彼を介してソウルで会ったもう一人の女性社会学者もわたくしたちを夕食に誘ってくれた。韓国では割り勘という習慣がなく、誘ったものが全額負担するというのが通例で「友だちの友だちはみな友だち」ということだという。一般に韓国では友だちが予定しない人をつれて饗応をうけるケースがあり、初対面から濃密な交友関係を結ぶ。そして、生涯を通じてそのバランスシートを按配するというのである。釜山で遭

遇した友人の知り合いの結婚式でも、披露宴に出席してほしいとまったく関わりのないわたくしたちも誘われたが、さすがに遠慮した。

十四世紀末に成立した李氏朝鮮は「崇儒排仏」を基本政策にし、儒教イデオロギーが固い社会構造を支えた。当時の支配階級である士族＝両班階級には厳格な女子教育四原則があり、そのひとつに「接賓客」（家を訪ねる賓客を立派にもてなすこと）をおいた＊＊。

『朝鮮の料理書』（鄭大聲編訳、平凡社）によると、当時一般の庶民の旅行は街道筋の食堂兼飲み屋兼宿泊所である「酒幕」を利用したが、両班階級の旅行には不文律があり、地方の両班家を相互に利用しあう習慣だったという。見ず知らずの不意の賓客のために、家門の名誉をかけて渾身の力をふりしぼって饗応した。それを支えたのが女性であり、不意の来客に備える料理が漬物であり、塩辛であり、多種多様な酒の類であった。

封建社会の支配階級によって統制されたイデオロギーや習俗が庶民の習俗や考え方を規定していくのは道理である。一八六〇年代の朝鮮を紹介したフランス人宣教師シャルル・ダレの『朝鮮事情』（金容権訳、平凡社）には「すべての人に対する気前のよいもてなしは、この国の国民性であり、すぐれた美点である」とある。「客のもてなしは、誰もみな、最も神聖なことと見なしている」。そしてそれをしないのは「単なる恥であるばかりでなく、大きな過ちである」とされる。ダレはこれを「習慣」といった。

韓国には儒教的秩序や倫理観が色濃く残っているとはよくいわれる。女性が顔の向きをかえ、手をかざして隠すようにして酒を飲むとか、ハイヤーの運転手がわれわれの前では決して喫煙しないとか、出迎えた若い女性が直ぐわたくしの手荷物を持とうとする等のことを短い旅行のなかでも目撃し、経験した。中国明代の随筆集とも百科全書ともいえる『五雑組』（十六、七世紀）のなかで、日本の評価がきわめて芳しくないのに対して、朝

鮮を礼節の国といい評価が高いのも、納得できるような気がした。

しかし、近代の都市文化は個人の自由と平等と人権とを基盤に、むしろ個人主義的で淡白な人間関係を創造してきた。これらを十全に発展させる方向がやはりこれからの趨勢であろう。たとえば割り勘だが、それはそのとき限りで金銭を介した関係を清算し、粘着的な人間関係を後々まで残さないという、近代市民社会がもっている世界的な普通の原理であって、韓国人が批判するように、日本人がケチで特殊なのではない。世界中で行われているポットラックパーティの類も一種の割り勘原理であろう。韓国人の濃密な人間関係も早晩なんらかの変貌を余儀なくされるに違いない。

しかし、それはそれとして、姜先生がこの秋には社会調査のために彼女の友人と連れだって来日する予定である。拙宅を訪ねる可能性がある。そのときは及ばずながらさきのような韓国流でもてなすことにしよう。

＊尹奉吉は上海虹口の青物市場の野菜商人であった。一九三二年四月二九日の天長節祝賀会場で、陸軍大将白川義則を爆殺し、野村吉三郎、重光葵らに重傷をおわせて処刑された。いわゆる「上海虹口公園事件」である。三・一独立運動を契機に組織された上海における大韓民国臨時政府国務委員主席金九の指令をうけたものという（『白凡逸志』金九自叙伝）。

＊＊四原則とは、仕剪姑（剪や姑によく仕える）、奉祭祀（先祖の法事等を立派にやりこなす）、針線紡績（裁縫、掃除、洗濯）と「接賓客」である。「接賓客」は料理作りの基本でもあった。

（やぎ　みつお・にいがた県民教育研究所所長）